

# 読書感想文

「動物たちは何をしゃべっているのか？」

山極 寿一、鈴木 俊貴：著  
集英社

宮城県  
宮城県仙台第一高等学校  
長田 悠真

動物たちが鳴き声などの言語を使用していることは一般的に知られている。しかし、動物が言語をどのような目的で使うのか、どのような意味を持つのかなど、多くの疑問が残る。

本書では、ゴリラなどの霊長類の研究を行う山極寿一氏と、シジュウカラなどの鳥類の研究を行う鈴木俊貴氏が、研究する動物の垣根を越え、言語をテーマに対談を行っている。本文は二人の会話文の形式であり、本文と一緒に用語の解説も載せられているため、専門的な内容でも、誰でも理解することができるだろう。本書は、動物の言語、動物の思考、言語からみる人間の特徴、人間の言語の未来という4つのテーマごとに分かれており、それぞれの内容について紹介していきたい。

まず、パート1では、さまざまな動物が用いる言語について、いくつか例を紹介している。たとえば、鈴木俊貴氏が研究しているシジュウカラは、ヘビには「ジャージャー」、タカに対しては「ヒヒヒ」と、天敵によって異なる警戒音を発する。これは、シジュウカラは天敵によって対処法が異なるためだという。動物たちの言語は環境に適應するように進化したため、住む環境によって言語は異なる。私は、本書を読んで初めて、動物たちの言語が私達の想像よりも高度であることを知り、深く感動した。

次に、パート2では、動物たちの言語や認知能力について解き明かそうとしている。たとえば、山極寿一氏が研究しているゴリラやチンパンジーは、言語だけでなく、踊りや歌も重要なコミュニケーション手段として用いる。また、シジュウカラは、文法（単語の順番）や併合（二語を一つのまとまりとして認識する）の能力があることがわかっている。それから、動物たちには、大量の画像を記憶するなど、動物にあってヒトにない認知能力もあるという。

そして、パート3、4では、動物の研究から発展させ、言語とコミュニケーションの観点からヒトという生物の特徴や未来について述べている。動物たちのコミュニケーションは「暗黙知（言葉にならない情報の伝達）」を多用しているが、人間は「形式知」である言語に依

存しているという。つまり、現代社会の人間はインターネットなどの言葉だけを読み取り、その文脈や込められた感情などの非言語的な情報を理解しようとしなくなっているのだ。近年、SNSで起きる炎上の大半は、こうした非言語的な情報が読み取られないことによって、食い違いが生まれて起きているのだと思う。私は、この見解を踏まえて、言語だけでなく文脈から感情を読み取ることを大切にして、無駄な争いをなくしていくべきだと実感した。

本文中で、こうした動物の言語に関する研究は、つい最近までほとんど行われていなかったと何度も述べられている。その理由の一つは、動物は複雑な思考を持たないと考えられてきたからだ。かつては、人間を動物の頂点として、「それよりも劣る動物はどれだけ人間に近づけているか」と、人間との差分を測る研究スタイルが一般的であった。鈴木俊貴氏は、「人間と動物の二項対立から離れて、俯瞰的な視点で言葉や人間の能力とは何かを理解するべきだ」と述べている。私は、こうした人間至上主義的な考え方は、人間が持たなくて動物が持つさまざまな能力から目を反らさせ、人間や動物についての研究を遅らせるかもしれないと考えた。そのため、動物たちの持つ能力の可能性に目を向けて研究を行うことが、動物を真に理解するために必要であると感じた。

私は、本書を読んで、動物たちの持つ能力の高さに感動するとともに、研究対象の動物について深く知ろうとする鈴木俊貴氏と山極寿一氏の研究の姿勢に感銘を受けた。両氏とも、研究対象の動物に対する深い尊敬と愛情の気持ちが感じられ、こうした研究姿勢こそ、動物、そして人間について理解するために必要な姿勢であるのだろうと思った。本書は、このように動物たちの言語やコミュニケーションに関する最新の知見を知ることができるだけでなく、動物、人間、そして現代社会と、テーマを広げながらこの世界について新たな視点で考察することを可能にしてくれる一冊であると感じた。動物に興味がある人だけでなく、興味がない人にも理解しやすく、楽しみやすい内容である。ぜひ、この本を読んで、動物たちと人間の未来について、考えてみてほしい。